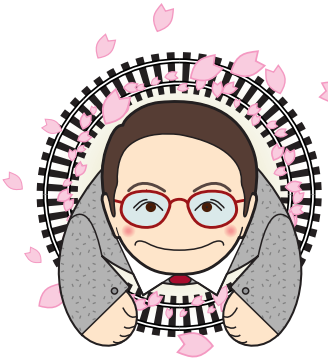

Joker 2号 大内雅博の

当たらずといえども遠からず

連載

正会員　編集委員　大内雅博 OUCHI Masahiro（高知工科大学助教授）

現在、世界で一番建設投資が盛んなのはいうまでもなくアジアである。第二次世界大戦終了直後にはヨーロッパとアメリカで9割を占め、世界全体の5％を占めるに過ぎなかったアジアの消費量が、現在は世界の3分の2を占めるに至っている(**図-1**)。消費の絶対量では200倍の増加である。

一人当たりのセメント消費量で比較してみよう(**図-2**)。世界の人口の半分以上がアジアに集まっていることに鑑みれば世界平均とアジア平均がほぼ一緒であることにはすぐに合点がいくが、アジア内部での地域差がきわめて大きいことに驚く。比較的少ないのが西南アジア(インド付近)と東南アジア(タイ、シンガポール付近)である。一方、その多さに目を引くのが産油国の多い西アジア(中東諸国)、そしてわが国が属している東アジアである。この地域の人口の多さに鑑みれば、アジアのなかでも世界の建設投資の中心は東アジアという言い方ができよう。世界の消費量のなんと半分である。この統計上、東アジアに属する国々および地域は人口順に、中国、日本、フィリピン、韓国、北朝鮮、台湾、香港、モンゴル、マカオである。世界最大の建設市場の有する東アジアにおけるわが国の役割について、改めて考えさせられる。

さて、わが国と特に関係の深いアジアの主要国の一人当たりセメント消費量を、GDPと比較してみよう(**図-3**)。韓国を頂点として山を描くような線を引くことができる。すなわち、経済が成長すればセメント消費量、すなわち建設投資も増えるが、ある程度まで発展すれば建設投資が落ち着き、減少するということである。他のアジア諸国と比較すれば経済が発展し尽くしてしまった(？)わが国は、今となっては決して多くはないどころかむしろ少ないほうであるといえよう。なお、世界全部の国・地域の一人当たりGDPとセメント消費量との関係については2006年5月号の本連載第2回を

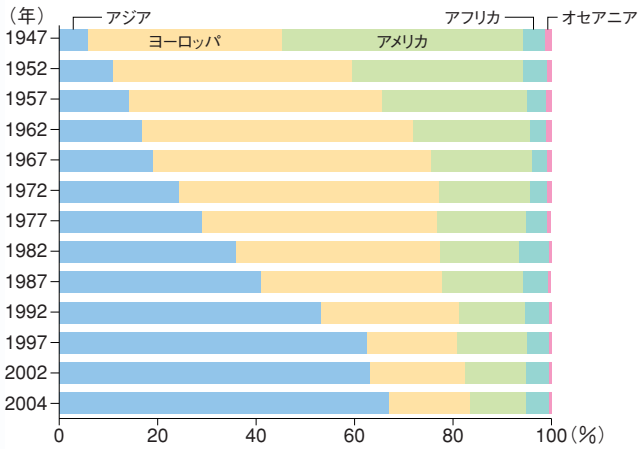

図-1　各地域が世界のセメント消費に占める割合の変遷（ヨーロッパにはCIS諸国を含む）

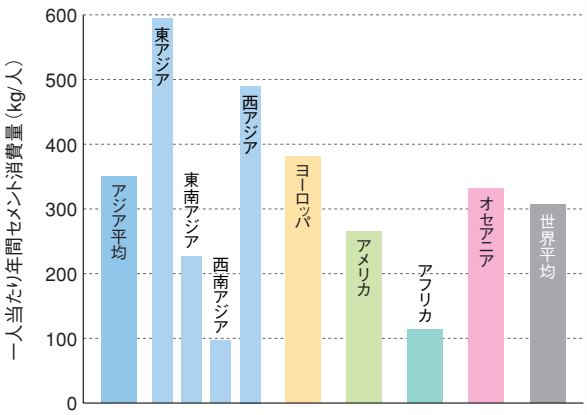

図-2　各地域の一人当たりセメント消費量（2003年）

第 13 回

アジアの台頭

ご覧いただきたい。当然のことながら今回と同じ傾向であることを確認できる。

さて、これらアジアの国々には今後どれほどの建設需要が待ち受けているのか。今回は取り急ぎ、前回登場した「一人当たり累積セメント消費量」をアジア諸国について求めてみた(図-4)。いわば、現在の各国の人口一人当たりが保有しているコンクリート構造物の量に対応していると見なす。

大雑把に眺めると二極化、または、細かく見ると3つのグループに分かれているといったところか。日本、台湾、シンガポール、韓国、そして香港が20トン程度のいわば「先進国」である。中間がマレーシア、中国、タイの5～10トン。ある程度はセメント消費が蓄積してきた感があるが、まだまだいけそうである。少ないほうが5トン以下のフィリピン、ベトナム、インドネシア、そしてインド。先進国と比較すればコンクリート構造物がほとんどない状態で今後の莫大な建設投資が予想されるというべきか。

コンクリート構造物や建築物は一度建設されれば半永久的に使用されるものである。各国の累積のセメント消費量を求めることは、これらの充足度、ひいては建設需要の今後の目安になると思う。

ちなみに、わが国の一人当たり累積セメント消費量が2004年の中国と同じ値(7.5トン／人)であったのが1973（昭和48）年、インドと同じ値(1.7トン／人)であったのが1953(昭和28)年である。なんとなく、なるほどと思いたくなってくる。

そして、そんなことに思いを馳せて比較しながらアジアの国々を訪問するのはとても楽しいと思う。

【データ出典】
CEMBUREAU: World Cement Market in Figures 1913/1995

（資料提供：(株)セメント新聞社）

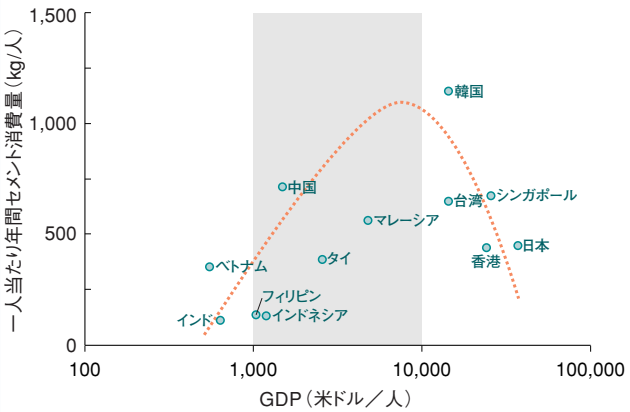

図-3　アジア主要国の一人当たりGDPとセメント消費量との関係(2004年)

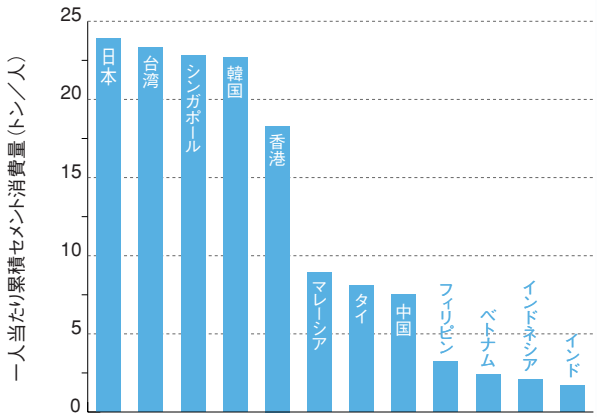

図-4　アジア主要国における一人当たり累積セメント消費量（1920～2004年までの累積消費量を2004年の人口で割った値：ただし1939～1946年のデータは存在しないため含まれていない）

（キャラクター＆外枠デザイン：宇野洋志城）